

4. 右冠動脈を責任病変とする急性心筋梗塞に対するRESCUECath™の有効性の検討

(八王子医療センター・循環器内科) 北原 綾

【目的】 RCAを責任病変とするAMIへのPTCAで末梢塞栓、No reflowを合併する事がある。その為、末梢塞栓予防に病変部の血栓やアテロームを吸引するRESCUECath™を使用しその効果を検討した。

【対象】 2000年9月から2000年12月の4ヶ月間に当センターに入院したAMI61症例のうちRCAを責任とする24例についてRESCUECath™を使用した8例(A群)と使用しなかった16例(B群)とした。

【方法】 冠動脈造影の所見からPTCA後に責任病変より末梢に血栓塞栓を認めたものを末梢塞栓(+)としTIMI flow Grade 2以下をslow flowまたはNo reflowとした。

【結果】 A群で末梢塞栓、No reflowの合併は0例(0%、0/8) B群で末梢塞栓、No reflowの合併は3例(19%、3/16)

【結語】 RCA病変のAMIのPTCAに際しRESCUECath™の使用は末梢塞栓の予防に有効である事が示唆された。

6. 指尖加速度脈波による膠原病等の末梢循環障害時における血行動態の検討—人工循環装置を用いた理論的、実験的検討—

(霞ヶ浦病院・皮膚科) 奥田 知規

膠原病や糖尿病性潰瘍などの末梢循環障害をもつ疾患の指尖加速度脈波を測定すると疾患により脈波が異なる。しかし、これらの脈波に反映される波形変化が測定部位の血管自体の局所変化によるものか、あるいは循環全体の変化が波形に影響をあたえているものなのかについては明確でなかった。そこで、物理的な因子と脈波との関係を明らかにする目的で人工心臓を用いた模擬末梢循環回路を設計試作した。末梢循環系として、シリコンチューブと犬の頸動脈を使用した。血管の伸展性、硬化度を表す指尖加速度脈波b/a値および末梢循環動態の指標となりうるd/a値を検討したところ、b/a値では人の指先と最も近い値を示したのは犬の頸動脈血管であり、人工チューブでは直径4mmチューブであった。血管を軟らかくするとすべてのチューブでb/a値は低下しており、b/a値が血管の伸展性の指標となることが確かめられた。一方、d/a値に関しては特に変化は見られなかった。

5. 冠動脈病変に対する糖尿病、インスリン抵抗性の影響

(内科学第二) 天谷 和貴

冠動脈病変に対する糖尿病、インスリン抵抗性の影響を前向きに検討した。対象は待機的に冠動脈造影を施行した症例中バイパス術後を除外した連続54症例。男性46例、女性8例、平均年齢60±10才。うち、狭心症26例、陳旧性心筋梗塞症13例、その他15例であった。有意狭窄枝数別にHbA1cを比較すると、0枝：5.5±0.5%、1枝：6.3±1.2%、2枝：6.6±1.9%で、1枝、2枝が0枝に比し有意にHbA1c高値であった(p<0.01)。有意狭窄別のHOMA-Rは、0枝：2.6±1.4、1枝：3.5±1.5、2枝：5.2±1.8で2枝が0枝に比し有意にHOMA-R高値であった(p<0.01)。また、TG、Tcho、LDL、RLPについては有意差を認めなかった。HbA1c、HOMA-R値は冠動脈病変重症度と有意な関連があることが示唆された。

7. 川崎病におけるMR-coronary angiographyの有用性の検討

(小児科学) 渡辺 嘉章

【目的】 呼吸同期法、呼吸停止法による心電図同期MR-coronary angiographyにより冠動脈病変が評価できるか心エコー、心臓カテーテルによる冠動脈造影と比較検討した。

【方法】 対象は川崎病を発症し、冠動脈病変を残した3児。冠動脈造影を全例に対して施行し、うち3例は造影MRCA施行、1例は非造影MRCAを施行。また心エコーは全例に施行しそれぞれ比較検討した。

【結果】 心臓カテーテルによる冠動脈造影とMRCAとの最大径の較差は3mm以内であった。拡張形態はほぼ同様であった。

【結論】 本症例では十分な血栓の抽出はできなかったが、冠動脈の拡張に関しては心臓カテーテル検査とほぼ同様の結果となり、評価可能であった。川崎病は乳幼児に好発し、長期のフォローが必要となる。侵襲の少ない本法は有用であると考えられた。